

当日は百人を超える参加者を集め、またラジオや新聞で取り上げられるなど予想以上の反響を得た。選手として、あるいはコーチとして活躍する4人のパネリストの意見（第1部）と討論（第2部）の内容をまとめ、ここに紹介してみたい。

WSF Japan創立1周年記念シンポジウム「スポーツに生きるとき」 百人以上の参加者

スポーツは最高のぜいたく

生沼スミ江



私がバレーボールを始めたのは小学校6年の時、父が亡くなったのがきっかけでした。突然の父の死にショックを受けていた私に、「ドッジボールでもして苦しい事を忘れなさい」と、担任の先生が私にボールを手渡してくれたのが、バレーボールを始めるきっかけになったのだと思っています。それから半身不随の母との2人暮らし。食事の仕度に洗濯と、家事や体の不自由な母の世話に追われながら、唯一、心の支えとしてバレーボールを続けてきました。貧しい中でも、皆とチームワークを考え、勝つことを目標に練習するいつかのうれしさや楽しさが、私にとっては最高の「心のぜいたく」だったんじゃないかと思います。バレーボールから学んだことは、チームワークの大切さです。いろいろな性格を持った人間がひとつの目標に向かっていけるのは、チームワークがあるからです。つまり、何をやるにしても、一人ではできないということを知りました。

メキシコ五輪（1968年）後、私は目標を失い一度は引退しました。しかし、やめてみて、深く求めていける道としてバレーボールの魅力も、改めて知ったのです。そこでミュンヘン五輪（1972年）後、自分で大切にできたものと仕事と一緒にできれば最高だと思い立ち、会社をお願いして全国のママさんバレーの指導という仕事をいただくことができました。もう10年続いています。改めてスポーツはぜいたくだなと思います。自分の好きな仕事をし、お給料を頂き、皆さんのお手伝いができる——こんなぜいたくはありません。私にとってバレーボールは人生であり、バレーボールから生きる道を教えられたといっても過言ではありません。

メキシコ、ミュンヘン五輪の全日本女子バレーボールチームの名セッター。東京・三鷹高校でインターハイに優勝。その後、日立武蔵（現日立）に入社し、日立の第1期黄金時代を築く。昭和47年に引退。翌年から「日立バレー教室」の指導を始める。昨年のアジア大会で初の全日本女子チームの監督として采配を振った。昭和21年10月8日、東京都生まれ。

女性としてヨットを楽しむ

小林 則子



ヨットとの関わりは、「自分の手で海に出たいな」と思い、その乗り物として、風を使ってどこまでも自由に行けるヨットを選んだということから始まりました。一般的にヨットは、直接に接する機会が少なく、技術的にも経済的にも、また、危険性ということからも、自分たちの身近なものではないと考えがちですが、実際はそうではありません。経済面ではスキーやテニスとそう変わりはありませんし、技術的な面においても、天気の良い日に水面に出て帰ってくるぐらいならば、小学校6年生ぐらいの判断力、体力、反射神経があれば、半日か1日で誰でも覚えられます。

他のスポーツでは男女の差が問題になりますが、ヨットは逆に、男女の別なくできるものです。男女の力の差よりむしろ、運ぶ船の種類と、どう楽しむ方をするかという関わり方が、問題になります。個々の力や体力の差を見極め、自分に合った船を選び、それに合った楽しみ方を見つけることで、性別に関わりなく、子供から70代の人たちまで楽しめるスポーツです。

スポーツそのものは、本当は社会的身分に関係なく、誰でも同じレベルで楽しめるはず。しかし、実際にはいろいろな社会的要素を持った人間が、スポーツの世界にスライドして行くわけです。それゆえ、本来老若男女を問わず、「自然の中でどうやって人間が生きていけるか」というヨットの世界にも、どうしても「女性である」ということでの壁はあるわけです。が、今は世の中も変わっていますし、ヨットスクールに関してはそれはありませんので、これからセーリングを始めようという人には、恵まれた時代といえるでしょう。

都立白鷗高校を卒業した後三井物産に入社、ヨットを始める。その後、AP通信東京支局、オーシャンライフを経て、昭和49年からフリージャーナリスト。49年、第1回沖繩レースに「チタⅢ号」のクルーとして参加し優勝。50年、「リブ号」で日本女性初のヨットでの単独太平洋横断に成功。昭和24年9月25日、東京都生まれ。

ポジウム「スポーツに生きるとき」 を集め大成功に終る



自分を厳しい環境に・・・

佐藤 直子



私がテニスを始めたのは幼稚園に入る前からで、幼い頃から世界一になることに憧れていたという感じです。ですから、プロになることは夢であり、その点では今、十分満足しています。

16歳で初めて海外遠征をし、18歳でヒューストン大学に留学したわけですが、その時期に、米国における女子プロテニス界の活発な動きに触れました。当時は、キング夫人を中心に、賞金や使用コートなどにおける男子との待遇の格差を埋め、男子に追いつけ追い越せと一致団結して活動していた頃で、(米国WSFの活動もそのひとつ) プロの仲間入りをしてはいた私は、いろいろなお話を教わりました。

私は現在、年間6カ月程、海外遠征をしているのですが、海外では自分一人で、飛行機から練習コートや相手など全部を手配しなければなりません。一方、日本にいるぶんにはどこに行っても待遇はいいし、便利だし、賞金もいいし、ずっと楽なのが現実です。実戦でも海外から帰って国内のトーナメントに出ると、とても楽なんです。私は自分を常に厳しい環境に置き、自分を強く鍛えていくことが大切だと考えます。このことはテニスに限らず人生において大切なことだと思います。

もう一つ、海外に出て日本人と外国人との考え方の違いもよくわかります。テニスでは、外国人は長所を伸ばそうとするのに対し、日本人は悪いところを直そうとばかりする傾向があるのです。その結果、長所もなんとなくダメに思えてきてしまう。たとえ平均点が悪くても、自分の長所短所を知り、いいところを押し出すようにすれば、自信が生まれてくるものだと思うのです。こんなことを人生に応用したいと考えています。

3歳から両親の手ほどきでテニスを始める。昭和48年、18歳で全日本室内選手権に優勝。史上最年少チャンピオンとなる。米国女子テニス界の大御所ヘルドマン女史に見出され、学習院女子部から米国ヒューストン大学に留学。53年、ホワイトクロス（豪州）と組んだダブルスで全豪オープン準優勝。昭和31年1月2日、東京都生まれ。

ボウリングは精神安定剤

杉本 勝子



私は今、37歳ですが、小さい頃から現在まで、体を動かすことが好きでスポーツひとつに賭けてきました。中学、高校、実業団と12年間、バスケットボールに青春をかけ、それでも

飽き足らず、年をとっても長くできるスポーツを、というわけで、ボウリングを選んだわけです。12年間のバスケットボール選手生活のおかげで、ボウリングに転向してからも、練習に苦痛を感じなかったことが、強味でした。

そうして全米クイーンズ優勝を果たしたわけですが、ひとりの女性としては、いろいろな問題を抱えています。それはやはり、「結婚」という問題です。私は不器用なので、スポーツと結婚は両立できないと判断し、いまだ独身です。寂しいと思うことはもちろんありますが、何かに打ち込めることの充実感や、汗を流した後の爽快感を、一般の女性の方々に味わってほしいな、と思います。

ボウリングに限らずとも、何か毎日、打ち込めるものを持つことによって、いつまでも若く、美しく、そして心のゆとりを持って生きられるのではないのでしょうか。

私にとってボウリングは、一種の精神安定剤のようなもので、練習にしても試合にしても、結果が良ければ非常に心が豊かになり、毎日が楽しくなります。逆に調子が悪いときは、暗くなってしまいます。ですから、自分自身で目標を設定し、一生懸命練習して、調子を良くして心を豊かに保てるように心がけています。皆さんもぜひ何かに打ち込んで、心豊かに生きていただきたいと思います。

ボウリングの世界選手権といわれる全米クイーンズで昨年、2連勝を遂げる。倉吉西高校（鳥取県）時代はバスケットボールのセンタープレーヤー。キャプテンとして活躍。さらに東レ瀬田に入社しプレー。引退後、選手寿命の長いボウリングを始め、昭和47年にプロテスト合格。昨年は賞金ランク1位。昭和20年6月20日、鳥取県生まれ。